学位論文の要約

論文題目　なぎなたの変遷に関する歴史社会学的研究
——武士の武器、女性の武道、そして国際発展——

申 請 者　BELLEC CHLOE ANNE HELENE

論文要旨

薙刀(近世以前は長刀と表記されることが多い)は中世、特に鎌倉時代・室町時代の戦場において武士の武器としてしばしば利用されたが、現代では「なぎなた」として女子向けの武道として知られている。本論文は、薙刀(長刀)が男性の武器から女子の武道に変化した歴史について、特にジェンダーの観点から明らかにし、なぎなたの国際発展の結果、なぎなたがなぜ海外では男性に人気があるのかを検討したものである。

薙刀(長刀)とは、長い柄の先に反り返った長い刃をつけた武器であるが、平安後期の後三年の役（1083 年から 1087 年）のころから室町中期まで、僧兵と武士によって主流武器の一つとして用いられた。16 世紀になると、鉄砲や槍の出現によって、薙刀は次第に戦場で使用されなくなったが、薙刀は古流派の稽古を通じて教えられ、稽古で使用する木製の薙刀や術はそれぞれの流派によって様々である。そして 19 世紀末から 20 世紀半ばまで、薙刀は学校教育における女子体育の中の武道として発展するようになった。第二次世界大戦後、薙刀の教育はしばらく禁止されたが、1955 年 5 月に全日本なぎなた連盟が結成され、それまでの「薙刀」は、「なぎなた」と改められた。そして学校で稽古を行いやすいように、各古流の薙刀術が統一され、なぎなたは学校のクラブ活動として発展した。現在、なぎなたは日本全国で盛んに行われているが、1990 年に国際なぎなた連盟が発足し、現在は 14 ヵ国が加盟するなど、国際的にも普及している。なぎなたは女性のための武道として日本から輸出されたが、海外では数多くの男性がなぎなたの稽古をしており、このことが海外におけるなぎなたの特徴として挙げられる。

そこで、この論文では薙刀(なぎなた)が時の流れとともに、どのように男性の武器から女性の武道へ移りかわったのか、戦場の武器であった薙刀が、いつ、どのようにして女性が使用する武器に変わったかを明らかにし、さらに、20 世紀前半の薙刀教育で女性に何が期待され、社会状況の変化に伴い、その期待がどのように変遷していったのかを検討する。特に、第二次大戦中の日本において、文部省が女子教育においてなぜ薙刀を必修したのかを考察し、武道としての薙刀の普及を試みた文部省の見解を明らかにする。最後に、なぎなたが国際的に普及していく中で、なぜ、海外では主に男性に人気が出たのかを検討する。

本論文は、中世から現代までの長い時期を扱っているため、利用した史料と研究は多岐にわたっている。中世と近世における女性と薙刀に関する直接的な史料は、管見の限り存在しておらず、本研究にあたっては、多様な傍証的な史料を分析対象とした。明治時代からの薙刀教育については、19 世紀末期から 1943 年までに出版された、薙刀教育に関する 27 冊の教本を分析した。教本に加え、文部省によって出された法令や、1943 年に行なわれた薙刀の必修に関する座談会の記録などを史料として用いている。現代のなぎなたを考察するにあたっては、全日本なぎなた連盟と日本武道館が創立記念日ごとに発行した連盟の歴史を伝える本と大会のプログラムとを分析した。

第 1 章では、中世から江戸期までを考察し、薙刀(長刀)が武家の女性によってどのように利用

されたかを検討した。中世の戦場で戦った女武者と武芸の教育を受けた女性の例があるものの、女性が長刀を使うということは総体としては希なことであった。つまり、長刀を手にして戦った人は、中世においては一般的に男性であった。戦乱が多い戦国時代において、武家女性が利用する武器の中に薙刀も含まれていたことを推測する史料があるものの、薙刀を女性が使ったかどうかは、まだ史料の中に確たる証拠を見つけることができない。つまり、現状では、戦国時代の城郭の攻囲において、武家の女性が薙刀を用いて戦える状況があったということしか言えない。

江戸時代における武家の女子が薙刀の稽古をしていたことは明らかであるが、女子の稽古について述べられている史料は希で、女子の武術教育については詳しく論じることができない。また、江戸時代の草双紙に描かれている、女性が主に用いていた武器は、薙刀より刀の方が多かったが、薙刀は、男性よりももっぱらに女性に利用されていた。すなわち、薙刀は女性の武器として考えられていたと言えるだろう。そういう意味で、江戸時代では、薙刀が武家女性の武器として見なされるようになっていたものの、薙刀より刀・弓矢などの武器を利用した女性の例が多く発見されるため、薙刀は、武家女性が薙刀のみを用いるという意味での特別な武器ではなかったことが明らかになった。

次いで第 2 章では、薙刀教本と「列女伝」の分析を通じて、20 世紀初頭において薙刀教育がどのように女子に相応しいものとされたのかを明らかにした。20 世紀の初頭における薙刀教育の対象は、まだ女子に限定されていなかったが、1910 年に薙刀は師範学校の女子生徒を対象に課外活動として認められることになり、1914 年には高等女学校などにも対象が広がった。薙刀教本の中では、明治時代に刊行された「列女伝」の中に登場したのと同じ歴史上の女性が参照されている。「列女伝」の図像においては、武器を使っている女性は多いが、薙刀ではなくて刀を利用する武家の女性が主に描かれていた。にもかかわらず、薙刀を武家の女性の武器として定義することで、歴史の中の武家の女性たちは主に薙刀を利用したと思い込むことできたのである。

1925 年までの薙刀教本の中には、薙刀を用いる男性の例も述べられており、それは男女向けの薙刀教育においてなのである。そして、薙刀教育の対象が女子だけになると、薙刀教育に関する雑誌と新聞の記事は、薙刀と関わる女性の例を主に挙げるようになった。薙刀を利用した有名な女性の例を挙げることは、女子向け教育として薙刀を正当化することであると同時に、薙刀が女性らしいものになることである。つまり、薙刀が女子に適した武道であることを正当化するために、その薙刀に「女性らしさ」という特徴を組み込み、薙刀を女子のものとして再定義したのである。

そして第 3 章では、戦争中である 1943 年に、文部省がなぜ薙刀を女子師範学校、高等女学校、女子実業学校の正課必修としたのかという問題について考察した。1936 年に高等女学校などで薙刀は正課になり、女子教育に相応しいものとする試みが続いていった。日本の歴史上で薙刀教育を受けた女子は、武家の女子であったが、薙刀教育を利用して、現代の女子と武士の娘とのつながりが強調された。世の中が戦争ムードに彩られて行く時、女性は家族生活を維持するとともに、社会と国家にかかわりながら、戦争を家族から支える役割を担わされた。薙刀教本の中では、家族を守った女性の史伝と現実の女性が結びつけられ、女性は家族を率いて国を守るために戦争に協力することが奨励された。

薙刀を女子教育に採用することによって、女子の武道は男子の武道と差異化された。薙刀は女子武道を代表するものとされ、それによって男子との相違が強調されたのである。というのも、男女ともに戦時の期待に応えることが求められつつも、男女に期待される役割は異なっていたからである。女子は体錬科の「教練」を通じて軍事的な教育を受けたが、それは前線で戦うためではなく、国防という目的のためであった。海外での戦場で戦うことを念頭においていたというよ

りは、女子に国防という使命を達成させるためであったのではないかと思われる。男子と女子の武道の内容と目的は明らかに相違していた。

最後に第 4 章では、日本と海外におけるなぎなたのイメージを分析しながら、どうして海外でなぎなたが男性に人気があるのかを検討した。日本では、なぎなたは女性向けの武道として長い歴史を持っており、全日本なぎなた連盟に登録している人間はもっぱら女性であるため、今日でも日本においてなぎなたは女性のものとして認められている。1960 年代と 1970 年代に海外でなぎなたが普及し始めた時、その対象者は当然女性であった。アメリカ・台湾・ヨーロッパでもなぎなたの稽古を始めたのは女性だった。しかし、1990 年ころから男性がなぎなたを始め、やがて 1990 年代半ばから 2000 年代にかけて、ヨーロッパを中心に男性が主流になっていった。海外でなぎなたは、僧兵と武士が戦場で用いた武器としてのイメージを通じて普及したため、なぎなたの愛好者は男性のほうが圧倒的に多くなっていったのである。

外国人がなぎなたに日本の伝統武道としての価値を求めても、国際なぎなた連盟の創設と国際発展の奨励によって、なぎなたが日本の伝統的な武道としての本質を失う可能性があることは、全日本なぎなた連盟にとって不安材料の一つである。全日本なぎなた連盟がなぎなたの稽古をする男性に反対していれば、海外におけるなぎなたの変化をコントロールできなくなり、「非日本」的ななぎなたが作られたかもしれない。連盟はなぎなたの国際発展をコントロールし、「日本性」を保つために、武道における「伝統」の特徴を変えていったのである。さらに、なぎなたの創立国としての日本の面目を保つ方法として、世界なぎなた選手権での勝利を確固たるものとすることが求められており、そのこともまた、日本における男性へのなぎなた普及を奨励することに影響を及ぼしていた。

以上を要約すれば、元々男性の武器であった長刀が次第に女性のものとなっていったが、江戸時代には明確に女性のものとは言えないということである。薙刀は刀などとともに武家女性の武器一つであった。明治になっても、薙刀は男女ともにするものだったのに、女子教育の進展の過程で、特に戦時下において薙刀教育が女子だけに必修になると、薙刀は女性のものとなった。戦後、なぎなたとして復興したものの、海外で多くの男性がなぎなたをするようになり、再度、なぎなたの男性の武器としての側面に焦点が当たったといえるだろう。つまり、薙刀は絶対に女性の武器であるという考えは、20 世紀からの「創られた伝統」として見ることができるのである。

結局、明治時代から現代まで薙刀は、女性のものか、あるいは男性のものかと論じられるたびに、その歴史を通じて議論が正当化されてきたことがわかる。薙刀は日本女性の歴史と特に深く結びつけられているため、女子に適した活動と見なされている。またこのことを強調するために、巴御前のような有名な女性の例が挙げられている。現代になっても、同じ現象を見ることができる。現代の日本のように男性になぎなたの普及が奨励される時にも、その歴史が参照されている。武蔵坊弁慶のように有名な男性も例に挙げられている。結局、薙刀の歴史とこれらの人物の例を通じて、薙刀のジェンダー性が定義されていることになる。そしてそのジェンダー性は、薙刀を手にする男女それぞれの図によって表象されており、だからこそ、日本の薙刀教本とフランスの雑誌には図がつけられているのである。巴御前は、戦時下日本の理想的な女性を象徴しているし、「男性らしさ」を強調する武士と僧兵の図も、男性の武道としてのなぎなたを表象している。